

4-1-5-3 呼吸器科

1. 特色

1.1 小児呼吸器専門の診療科

1.2 豊富な臨床経験

1.3 小児気管支内視鏡検査

いずれも前年度と同様である。

2. 診療活動、研究活動

2.1 総括

本年度は、のべ患者数で外来・入院ともに前年度を上回った。また、疾患の種類も多岐にわたり、全体として順調であった。とくに他の医療機関からの紹介やインターネットなどを通じて直接受診される患者が増加した。診療圏も広がっているように感じられた。それとともに、重症度の高い症例が増加した。当科からの情報発信がますます重要になっていくことを実感させられた。急性呼吸器疾患を担当する総合診療部との連携については、まだ不十分であったように感じられた。出来るだけ接触を密にするよう努力する必要がある。各種画像、内視鏡、モニターなどの検査は、関係各所のご協力でほとんど順調に行えた。

2.2 外来

診察日は前年度と同様に、月曜午前（宮川）、水曜午前（川崎）、金曜午前・午後（川崎）とし、それ以外の曜日や時間でも、医師の都合が良ければ適宜診察を行った。とくに学童で水曜午後の希望が多かった。これは水曜午後に授業のない小学校が多いことによるものと思われた。現在、午後の外来枠は金曜のみであり、今後の希望状況によっては水曜午後に外来枠を新設する必要があるかもしれない。

延べ患者数は前年度を上回った。月別でみると、学校の長期休暇にあたる8月、12月、3月にピークがあったが、どの月も200-300人で、月別格差は前年度より減少した。

新患では、院外からの紹介は比較的順調で、紹介なしも少し増加した。一方、院内からの紹介は本年度も少ない印象であった。主訴としては、昨年度と同様に喘鳴、遷延性咳嗽、反復性気道感染症が多かった。セカンドオピニオンを求めて受診される症例もあった。これについては時間がかかるので、外来の設定枠以外の時間で対応した。

2.3 入院

本年度の入院患者数は一日平均で約8人であり、年間の延べ人数としては前年度を上回った。この変化を月別でみると、4月～10月は大きく増加、11月～3月は減少と二分されていた。昨年は初年度であったことを考慮すると、前半の増加は当然の結果といえる。後半については、昨年より急性感染症が減少した結果と考えられた。ピークは7月と10月で、2月は最少であった。前年度12月のようなオーバーワークになった月はなかった。

疾患名（一部症状名）はおよそ以下の通りで、種類としては前年度とほぼ同様であった。内容的には、難治性疾患の長期入院と慢性呼吸器疾患の感染併発による反復入院が多かった。急性呼吸器感染症、クループ症候群、周産期異常による慢性肺疾患はほとんどなかった。一方、嚢胞性肺疾患と気道異物は本年度も多かった。当科の特色が広く浸透しつつある結果ではないかと考えられた。

症例の重症度は確実に高くなっていると感じられた。診断のつかない症例や、診断はついても確立された治療法のない症例への対応に苦慮することが多くなってきた。当センターの性格を考えれ

ば当然のことかもしれない。一歩ずつでも前進できるよう努力していくしかないを考える。

A．急性疾患

1. 感染症

気管支炎、細気管支炎、肺炎、百日咳、クループ

2. 非感染症

気道異物、鑄型気管支炎

B．慢性・遷延性疾患

1. 上気道疾患

上気道狭窄（喉頭軟化症、声帯麻痺など）、嚥下異常（吸引性肺炎を含む）

2. 下気道疾患

気管狭窄、気管軟化症、気管支狭窄、気管支閉鎖、片肺欠損、肺低形成（scimitar 症候群を含む）

副鼻腔気管支症候群、慢性気管支炎、気管支拡張症、反復性肺炎、遷延性無気肺

気管支喘息、閉塞性細気管支炎

嚢胞性肺疾患（肺分画症、CCAM など）、特発性間質性肺炎、肺胞蛋白症

3. その他

睡眠時無呼吸、胸郭形成異常、縦隔腫瘍、横隔膜挙上症

2.4 内視鏡検査

喉頭ファイバースコープを 100 件、気管支ファイバースコープを 55 件行った。全例で重篤な副反応はみられなかった。

2.5 カンファレンス

毎週木曜日午後 7 時から放射線科の協力を得てカンファレンスを行った。内容は症例検討が中心で、文献的な最近の話題などの紹介も行った。オープン形式とし、院外からの参加者も受け入れた。

2.6 研究活動

本年度の臨床研究で印象的だった項目を紹介する。

- ・ 肺葉切除症例の術後肺機能：一葉のみの肺葉切除術を受けた小児の術後肺機能について検討した。肺活量と 1 秒量は、多くの症例で術後 2 年以内に良好な結果を呈していた。肺活量を上葉切除例と下葉切除例で比較すると、下葉切除例の方がより良好な結果であった。これはこれまでに報告されていない知見であった。
- ・ 生後 2 か月以降に出現した乳児の吸気性喘鳴：アデノイド腫大が最も多かった。哺乳との関連が示唆された。先天性気管狭窄が 4 割弱を占めた。狭窄の程度は軽度であった。喉頭軟化症は 1 例もなかった。
- ・ 気管支閉鎖の諸病像：気管支閉鎖は lobar emphysema が偶然の胸部異常陰影で発見されることが多い。当科では反復性肺炎や胸痛を主訴とした症例を経験した。反復性肺炎は、同じ部位に比較的境界明瞭にみられた。非感染時の胸部 X 線写真では一見して異常がないようにみえるが、CT では明らかな低吸収域を呈することが特徴であった。